

「命を選びなさい」

副牧師：松坂 政広

＜申命記 30章 15節～20節 新共同訳＞

「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。

わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。

もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、わたしは今日、あなたたちに宣言する。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはない。

わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。」

1月19日の日曜礼拝でお伝えした「モーセの物語4部作」の4回目に当たります。

＜メッセージ＞

2011年3月11日は、わたしたちにとって忘れられない日ですけれども、9年経った2020年の3月も、地震と津波と原発、と、新型コロナウイルスの違いはあっても、危機的状況から生と死を見つめるという点での共通項がありますね。その意味で、3.11をこれまでの年とは違った形でわたしたちは振り返っているのではないかと思います。

殊に、映画にもなった福島原発の真実が知らされて、あるいは、NHKスペシャルなどをご覧になって、改めて驚いておられる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

巨大地震の後、巨大津波がやってきて、海に面した原発3機が次々に直面した危機的状況と関係者がどれほど懸命に戦ったかは、かつてないほど知らされていますね。1号機がメルトダウンして水蒸気爆発を起こす。これ自体、現場では、何が起きているのかわからない中でのことで、3号機でも同じことが起き、建屋が吹き飛ぶという。それでもそれがどうやら最悪の事態ではなくて、彼らが覚悟した地獄というのは、最悪のことに、2号機では、それだけではすまされないところにまで至っていましたね。そのひと

つひとつの経過に関係者が全力で対処した様子が克明に報じられていましたけれども、2号機に至っては、水蒸気爆発に留まらない、核能容器自体が爆発する危機、最大の危機に見舞われて、あとは、神に祈るしかない。というところまで追いやられていましたね。もしもそうなら、東日本壊滅という東日本には人が住めない状況になっていたというのですよね。それは、地震発生から88時間が経ったところでの最悪の事態がまさに起きようとしていました。けれども、不思議なことに、2号機には、想定外の不幸中の幸いが起きた。最悪の事態を回避することにつながるものが起きたのでしたね。その一連の過程において、指導者が選び取っていったのは、共に働いていた人々の命の選択でした。

人命最優先を掲げながら、最後は、自分といっしょに死ぬのはどいつだ。になるわけですが、必死に命を選び取り続けたところで最悪の最悪をそれでも回避した奇跡の物語があつた福島の真実だったことをこの度再認識させられました。

主がご自分の宝の民として、地上のすべての民の中から選んだイスラエルの民を約束の地に導き入れるに当たって、命と幸い、死と災いの二者択一を彼らに問いただした際に、主は、「あなたは命を選びなさい。」とおっしゃいました。

命を選ぶとは、主を愛し、主の道を歩み、主のみこころに生きることです。

それは、まず主が愛して下さった！

主が道となって下さった。

主がみこころを示して下さったことがその前提にあります。

命を選ぶことの対局には、死と災いを選ぶという、他の神々にひれ伏す/仕えるという選択が存在していました。

主を愛し、主の道を歩み、主のみこころに生きることが、命を選ぶことになる。

今朝の聖書箇所の一節前には、主は、「あなたはそれを行うことができる(30:14)。」とご自身の民を励まされました。とかく、できない！と思いがちなわたしたちに、現実の視点と勇気を与えてくれることばですね。

「それ」とは何でしょうか？

それは、あなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるみことばです。

あなたのごく近くに、口と心にどんなみことばがありますか？

今朝の聖書が語り掛けている福音のメッセージは、あなたは命を選びなさい。とおっしゃっておられる主が、わたしたちが命を選び取ることができるよう、導いてくださるということです。

イギリスでは、1日に、愛する妻を突然失う夫が45人いらっしゃるそうですね。そのうちのひとりが、自殺をする人の気持ちに理解を示すようになったと言っていました。

自分の気持ちをうまく人に話せない彼が、カウンセラーに話すよりも、自分と同じ経験をした人の当事者としてのアドバイスを聴きたいと思って、その交わりに出かけていくと、自分は悲しみを箱の中に閉じ込めてふたをしていたことに気づかされたというんですね。そこに集まっていた人たちはひとりひとり違うわけですが、悲しみと向き合ってきた人たちに触れて、自分がまだ悲しみに向き合っていないことを知ったと。

自分たち家族が失ったものを考えたくないから、仕事に忙しくするしかない。ある人は、妻が亡くなる直前に、あなたは、失ったものを悲しむんじゃなくて、楽しかった思い出をかみしめてね！と言われたことが支えだという人もいました。残された家族で何でも口にするのを聞いた彼は、妻の、子どもたちの母親の思い出を思い出したら何でも書き出して、大きな瓶の中に入れることを思いつきます。そのことを早速始めると、子どもたちの心の中がわからないと言っていた彼が、子どもの本当の気持ちを引き出してやりたいと言っていた彼が、残された親のふるまいをみて、感情の出し方をまねると言われる子どもたちが、無邪気に気持ちを吐き出し始めた！

誰も彼の葬られた場所を知らない（34：6）。

と申命記の終わりに寂しく綴られているモーセの最後は、目もかすまず、気力も衰えていなかった120歳のモーセが、モアブの地で息を引き取って、主自らが、その谷にモーセを葬られた。と記されています。モーセに率いられた人々は、モアブの平野で30日間、モーセのために泣きました。こうして、イスラエルの民を執り成し続けたモーセの旅は終わりを告げました。「あなたは命を選びなさい。」という最後のことばを遺して。そのことばに主は命を注いで導かれます。

あなたは、旅の終わりにどんなことばを遺して行かれますか？